様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　１２月　２６日現在

機関番号：３２６６０
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：２００８～２０１０
課題番号：２０５２０２４６
研究課題名（和文）　ホテル表象にみる、社会の近代化とイギリス文学の係り－大戦間期を対象に－
研究課題名（英文）Modernity and the Hotel in English Literature between the Two World Wars

研究代表者
宗内　綾子（MUNEUCHI AYAKO）
東京理科大学・理工学部・講師
研究者番号：７０３８５５３２

研究成果の概要（和文）：
第一次・二次世界大戦間期のイギリス文学における「ホテル」の意義を探るため、この時代にホテルを主舞台とする作品を残したノエル･カワードとヘンリー･グリーンの作品を詳察し、成熟する「近代」社会に対する批評意識を彼らがホテル空間に描きこむ様子を追った。この作業を通して、この時代の作家たちが、ホテルに実現される「近代」的な経験を描く中で、新しい社会の様相を描くにふさわしい主題そして形式を獲得していった様子に迫った。

研究成果の概要（英文）：
This research examines the significance of the hotel in interwar English literature. Focusing on the work of Noël Coward and Henry Green, who used the hotel extensively, it examines the ways in which their work embodies criticism of 'modern' society though their varying representations of the hotel. It thereby demonstrates how writers' concern with 'modern' experience as realised in the hotel helped them grasp new themes and styles to depict emerging aspects of a changing society.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
２０年度	800,000	240,000	1040,000
２１年度	500,000	150,000	650,000
２２年度	300,000	90,000	390,000
年度			
年度			
総　計	1,600,000	480,000	2,080,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学　英米・英語圏文学
キーワード:イギリス文学　２０世紀小説　ホテル　近代社会　ノエル･カワード　ヘンリー･グリーン

様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

１．研究開始当初の背景

１８世紀後半から１９世紀中葉にかけて、インの発展として現れてきたホテル。それは近代化の一つの象徴でもあった。この新しい空間は、旧来の共同社会で培われてきたものとは異なる新しい人間関係を生みだす舞台となり、やがて文学の世界でも頻繁に登場するようになる。

ところが、その度重なる、そしてきわめて興味深い登場にもかかわらず、イギリス文学における「ホテル」の意義は、深く考察されることなく過ぎている。近年、シャーロット・ベイツは１９３０年代の「ホテル」表象に注目し、これを「近代」社会の特性である一過性・デラシネーションに対する作家達の関心の表れと論じたが、ホテルを基本的に旅あるいは移動との関係からとらえており、それゆえこの時代のイギリス文学における「ホテル」の意義の全貌を明らかにするには至っていない。

私はこれまで、当時のホテルが、社会の変化の先鋒として、その変化の行方を尖鋭的に指し示す「近代」的な空間ととらえられていたことを確認し、この時代のホテル表象を通して、社会の近代化と文学のかかわりを探ってきた。

２．研究の目的

（１）これまでの研究成果を引き継ぎ、本研究では、第一次・二次世界大戦間期にとりわけ高まるイギリス文学におけるホテルへの関心を、当時急速に形を整えつつあった「近代」社会に対する作家達の関心として読み解き、この時代の文学における「ホテル」の意義を探った。

（２）その際とくに、第一次・二次世界大戦間期にホテルを主舞台とする作品を残したノエル・カワードとヘンリー・グリーンのホテル表象に注目し、成熟する「近代」社会に対する批評意識を彼らがホテル空間に描きこむ様子を明らかにした。

（３）この作業を通して、この時代の作家たちが、ホテルに実現される「近代」的な経験を描く中で、新しい社会の様相を描くにふさわしい主題そして形式を獲得していった様子を追った。

１．研究の方法

（１）ノエル・カワードのホテル表象

ノエル・カワードが、「ホテル」を切り口に、近代における流動的な生のあり方を描く舞台形式を模索した様を、以下の資料研究を通して論考した。

①高級ホテルを舞台に、異性・同性・両性愛の男女の恋愛模様を描く戯曲『セミ・モンド』（１９２６年執筆）のホテル表象を、類似の舞台設定をもつ戯曲『シロッコ』（１９２１年執筆、１９２７年上演）のそれと比較対照し、『セミ・モンド』の舞台形式の特質を探った。

②『セミ・モンド』と類似の物語内容をもつ、オーストリア作家ヴィッキー・バウムによる国際的ベストセラー小説『グランド・ホテル』（１９２９）とその舞台化およびハリウッド映画化作品（１９３２）のホテル表象を考察し、「近代」表象と各メディアの親和性を探った。

③カワードの代表作『私生活』のホテル表象を、『セミ・モンド』のそれと対照させ、「近代」社会に対する彼の関心と洞察が、それぞれの作品でどのように表現されているか考察した。

（２）ヘンリー・グリーンのホテル表象

ヘンリー・グリーンが、成熟する「近代」社会の硬直とそこからの解放の糸口を探る文学形態を、ホテルを媒体に模索した様子を、以下の資料研究を通して論考した。

①フランス旅行へ向かう若者一行が、ロンドンの駅ホテルで立ち往生する姿を描く小説『パーティー・ゴーイング』において、霧に閉ざされた駅ホテルが、異質な人間やものの交通を支える結節点となっていることを検証した。

②本作において、ホテルを外部から閉ざす鋼のシャッターや、ホテル内部の各空間を隔てるドアや障壁が、時代変容の描出の演出に用いられている様を考察した。

③本作のホテル表象を、外部からの交通が絶たれたホテルという類似の舞台設定をもつレナード・ウルフの戯曲『ホテル』（１９３９年）等のそれと比較対照し、本作の結末部の再定義を行った。

（３）ホテル文学興隆を支えた歴史的文脈の調査・分析

当時のホテル文学、とりわけノエル・カワードとヘンリー・グリーンのホテル表象をより精密に理解するため、下記の基盤調査を行った。

①20 世紀初頭から第一次・二次世界大戦間期のイギリスにおけるホテルの発展、その多様化のあり様に迫る数値的資料（国勢調査結果や英国議会報告書等）

②ホテル設備、宿泊価格、顧客層等を示すホテル広告や設計図等の内部資料

③当時の新聞・雑誌記事、ガイドブック等にみられるホテル表象、ホテルに関する同時代

言説
④ロンドン郊外におけるホテルの発展史
⑤第一次・二次世界大戦間期の観光旅行の変遷を示す種々資料(とくに客船列車、飛行機を用いた旅行の広告、時刻表、価格等を示すもの)
⑥駅ホテル、および第一次・二次世界大戦間期に新築あるいは改装されたホテルの建築学的特性

４．研究成果
（１）ノエル・カワードのホテル表象
①本研究では、カワードの初期作品におけるホテル表象の比較対照を通して、これまで見逃されてきた、実験作家としてのカワードの姿を明らかにした。ここで扱った三作はいずれも、新婚女性がホテルでの異性との出会いをきっかけに新たな生を開始する様子を一つの軸に展開するが、そのような男女の出会いを生みだすホテル空間は、『シロッコ』では物語の背景にとどまり前景化されることがない。対して『セミ・モンド』では、この空間がもつ流動性や疎外的特質が、多数の登場人物を用いた複雑な作品構成によって舞台上に再現される。猥雑なホテルの様相をただ「忠実に」再現したようにも見える『セミ・モンド』のプロットの詳細な検討は、カワードが、たとえば小説におけるヴァージニア・ウルフのそれにも類する実験性を備えた作家であったことを示唆し、今後の作家研究に重要な視点を提供した。
②本研究ではまた、『セミ・モンド』においては多数の登場人物たちの動きを通して舞台上に表現される「近代」公共空間の流動性と疎外性が、『私生活』においては、二人の主要登場人物と観客との邂逅の中に展開されることを論考し、その際、両作品と、ヴィッキー・バウムの小説『グランド・ホテル』、その戯曲版、および映画版との比較対照を通し、演劇という「旧」メディアにおいて「近代」を描く際にカワードが直面した困難と挑戦が、近代における流動的なアイデンティティの在り方そのものを劇作法に構造化した『私生活』の創作へとつながった可能性を示唆した。「近代」表象と演劇メディアの親和性からカワードの劇作法を再考する本研究は、演劇とモダニズムの関係にも光を投ずるものである。

（２）ヘンリー・グリーンのホテル表象
①本研究では、従来、階級間の断絶の徴とみなされてきた『パーティー・ゴーイング』の主舞台、駅ホテルが、むしろ異種の人やものの往来や混淆を許容しそれを促す流動的空間として描かれていることを、ホテル内外の様々な空間に注目し確認した。この点を手がかりに、これまで、富裕階級層の甘えた若者の戯言と一括りにされてきた主要人物たちの言動と、彼らの人物造型に、グリーンが階級社会の瓦解と社会変容の行方を描き込んだ様子を明らかにした。本研究によって獲得されたこのような知見は、本作の多義性を指摘する一方で本作が１９３０年代のイギリス社会における階級間の断絶を描いているとする点に疑いを入れなかったこれまでの批評に、有益な修正を加えるものである。
②本研究ではまた、成熟する「近代」社会の硬直からの解放の糸口を探る文学形態を駅ホテルを媒体に模索したグリーンが、この空間を、時代の変容を映す鏡として用いながらも、旧時代の残滓と位置づけている点に注目した。この時代、かつてE.M.フォースターらの作品で新しい時代の到来を告げるものとして描かれたホテルは、たとえばレナード・ウルフの『ホテル』でみられるように、成熟し袋小路に陥った「近代」社会の象徴としても用いられるようになる。２０世紀前半のこのようなホテル表象の変遷のなかにグリーンのそれを位置づけるとき、本作には、ホテルを用いて新たな時代を描く文学を模索した「ホテル文学」の一ステージの終焉と、新たな文学の誕生が示唆されているようにも思われる。本研究では、この点を十全に分析することはできなかったが、ここで得られた視点は、この時代の文学の理解に寄与するとともに、今後の研究に大きな指針を与えてくれた。

（３）ホテル文学興隆を支えた歴史的文脈の調査・分析
当時のホテルに関するデータおよび同時代言説の収集・調査からは、この時代のホテル文学をより精密に読み解くための貴重な洞察を得た。ノエル・カワードとヘンリー・グリーンのホテル表象に関しては、とくに次の３点を成果として挙げることができる。
①この時代のホテルの発展、とりわけ駅ホテルの広まりとその凋落、またそれをもたらした鉄道旅行の発展と衰退、その客層の変化に関する理解は、『パーティー・ゴーイング』におけるヘンリー・グリーンのホテル表象、人物造型、物語進行のより正確な理解を可能にし、ここから、作品全体の再定義を可能とする重要な視点(上記（２）①）を得ることができた。
②リッツ・ホテルなどのグランド・ホテルを訪問し、その建築学的特性を実地に確認できたことは、ノエル・カワードの『セミ・モンド』に描かれる近代公共空間の疎外性（上記（１）①）を理解するのに役立った。また、グロヴナー・ホテルなどの駅ホテルを訪問し、公共スペース部分の歴史的変遷を確認でき

たことは、グリーンの『パーティー・ゴーイング』に描かれるホテルの社会的意義の移り変わり（上記（２）②）を理解するのに役立った。
③ロンドン郊外におけるホテルの発展史の調査を通して、この時代のホテル文学、とりわけ第一次世界大戦中にリッチモンドと異国のホテルを対比的に描き作品を構造化したヴァージニア・ウルフの『出航』をより精密に読み解くための貴重な示唆を得た。こうした調査成果は、大戦間期の終わり、第二次大戦勃発の年に出版された『パーティー・ゴーイング』のホテル表象の理解（上記（２）②）にも寄与するとともに、本研究の成果を、今後より包括的な大戦間ホテル文学論へとつなげるための確かな方向性をもたらした。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

① Ayako Muneuchi. 'From the *Ritz Bar* to the *Grand Hotel*.' *Studies in Liberal Arts and Sciences*. 43 (2011): 183-194. 査読有

② Ayako Muneuchi. 'Party Crashing: Social Permeability in Henry Green's *Party Going*.' *Studies in Liberal Arts and Sciences*. 42 (2010): 159-172. 査読有

③ Ayako Muneuchi. '"As jagged as all get-out": The Mechanism of Alienation in Noël Coward's *Semi-Monde*.' *Studies in Liberal Arts and Sciences*. 41 (2009): 389-403. 査読有

６．研究組織
(1)研究代表者
宗内　綾子（MUNEUCHI AYAKO）
東京理科大学・理工学部・講師
研究者番号：　７０３８５５３２

(2)研究分担者
なし

(3)連携研究者
なし